

Corbeau 8

1 9 5 8

コルボ才詩集

Corbeau Ⅷ

¥ 2 5 0

昭和三十三年九月一日発行

発行 京都市北区平野宮本町二三 コルボオ詩話会

電 話 ㊤ 1 8 8 5

印刷 京都市中京区御幸町通御池上 双林プリント

電 話 ㊤ 4 3 8 2

コ
ル
ボ
オ
詩
集

一
九
五
八
年
版

刊	裝	編
行	本	纂
山	本	福 安 荒
前	家	田 藤 木
實		泰 真 二
治	勇	彦 澄 三

Corbeau · 目次

福田泰彦 (六) 一二

カリホルニヤ・ボツビイ 他一篇

中島完 (一二) 二三

海 二 題

小野京子 (二四) 三一

我が楯に 他二篇

木村三千子 (三二) 三七

恋とは言えないにしても 他四篇

天野忠 (三八) 四七

人嫌い 他三篇

池田理 (四八) 五七

CARYATIDE

黒石立樹 (五八) 六七

晋 他四篇

相馬 大 (六八―七七)

ノートの白いページ 他四篇

荒木二三 (七八―八七)

バラは知っている 他五篇

竹内信夫 (八八―九五)

手網 他二篇

本家 勇 (九六―一〇三)

花園墓地にて 他五篇

片瀬博子 (一〇四―一二五)

誕生 他二篇

園部 脩 (一二六―一二七)

不透明な花 他四篇

安藤真澄 (一二八―一三五)

潮の岬 他三篇

(後記 一三六)

福田 泰彦

カルホルニヤ・ポツピイ
＊

朝 まだおまえは閉していた

そして夕べ

おまえの花はもう閉していた

こころを閉して出勤するぼくを見送り

いっそう閉されたところでもどつてくる

ぼくを迎えるのが

おまえはいやだった

●
苦痛の欠除においてもまた

ひとり夜ふけにだけ

そのぼろぼろのイメージをひろげようとする

かたくなな詩人を

おまえはあどけなく拒むのだった

今日ぼくはまた病んで窓ぎわにいた

(ほんとうは

今日こそおまえのやさしさに病んだのだった)

瓦礫の庭の片隅で

南風にここちもちくびをかしげた

最後のものにふさわしいおまえは

その小さな花びらをいっぱいひろげて

今日の日を他の日から区別するよう

はにかむように命じていた

* 和名 はなびし草

カ ン ナ

私は知っている

日曜の午後又しても抜け出していく私に

まるで気付かぬかのようにふるまいはじめた

あなたたちを

病いがちのそのからだを

せめて今日ぐらい横にしていってくれたら云々と

いつのころからか

もう引き止めようとはしなくなったあなたたちを

私は知っている

古びた急須の向うには間違ひなく

熱いお湯がたぎっていることを

ノビをする頭の下には

不当に白くされたカバーの枕が置かれてあることを

頸骨をコトコト鳴らすとき四本の手が競って

脊中のツボにメンフラを貼ってくれることを

それなのに私は

やはり野良猫のように抜け出していく

又もやネクタイでくびをしめ上げ

燃え上るカンナの道にはサングラスを

土砂降りの午後はゴム長にタウルまで携え

通い馴れた道を問もなく外して

影はひとりの旅人になる

そして私は知っている

夕べ

都心の喧噪と饅えた酒気に身をくるんで
放蕩児の足どりでもどってくる私に

まるで気付かぬかのようにふるまっている
あなたたちを

今日もまた

白布で覆った食卓をはさんで

わき目もふらず

自分らのしごとにいそしんでいるかのよう
装うてくれているあなたたちを

その

小さなしごとを

中 島 完

海

かれの頭上を水がどんなにして閉してしまったか
わたし達に決して知れはしないのだ
かれが苦悩をどんなにしてわたし達へと差し出したか
それもまた蔽われてしまったのだ

エミリ・デイクンスン

出来れば

いまから行きたいと思う、

行けるなら往ってしまってみたいと思う、

恐らく見かけより青くて
もつとひんやりとして暗くて
空間に無駄がなくて。

ああ

へ海をみたVという、

水夫は「海」をみたんだと――

沈んでゆく船の近くで

死んでゆく人の言葉の謎。

だがともすれば人たちの見る海は

幾十世紀となく信じてきたいつものあの場所、

魚たちに囲まれた青い墓場のような

墓場にしては余りに広く遠いような

静かすぎて恐いようなあの深さの。

ああ

△海をみた△という、

鷗は「海」をみたんだと――

潮風に翼の折れ

波にぬれた鳥の臨終の言葉の謎。

だがともすれば鳥たちの見る海は

ぎっしりと埋められた逆さの天、

ガラスのような非情の硬さの

入りこむ隙のない抽象でできた城。

△海をみた△といおうか、

俺も「海」をみたんだと――

死者の残していった表情のように